

がん医療最前線

がん告知患者の佐々木ひとみさんが

「がんになって気付いたこと」

「伝えたいこと」

余命数カ月…



がんの告知があると、誰もが「死」を意識する。

だが、「死」意識することは、「いかに生きるか」を再認識することでもある。

余命数カ月の宣告を受けた行政書士の佐々木ひとみさん（62）は、札幌市内で「終活セミナー」を開催している。

その佐々木さんに「生きる意味」について聞いた。

（8月28日、北海道大学病院にて収録）

すべての後始末を…

——がんの告知を受け
たのは、いつですか。

今年の6月です。主治医の先生から子宮体がんのステージ「ⅢのB」で、子宮体がんの中でもめつたにないタイプだと。がん自体は大きくて、いろいろな

タイプのがん細胞が混じっていて腹腔内に散らばっているの、がんを摘出することはできないと。抗がん剤治療は行いますが、「この抗がん剤が効かなければ、あと数カ月だ」と言われました。「す

べての後始末を、まずはしてください」と。

——余命宣告を受けられたのですか。

はい。「私、佐々木ひとみは、これで終わるんだ」と思いました。自分の人生を振り返ると、いつも仕事で忙しくて駆け抜けてきた感じでした。あと1カ月で自分のやりたいことができる矢先に「なんで今なの？」という思いでした。

——やりたいこととは。

昨年、2024年問題が話題になりましたが、知識を持った行政書士や社会保険労務士、税理士たちが、運送業者をサポートする取り組みを全国的に展開したかったのです。

やつとの思いで税理士を束ねている会社と知り合って、あと1カ月で勉強会を立ち上げる予定でした。

——きっかけは。

私は北海道中小企業家同友会に所属していて、私が経営する行政書士事務所の経営方針をつくることになりました。ところが、なかなか経営方針が立てられなくて3年目に出席した勉強会で、「あなたの仕事を通しての社会貢献は何ですか」という項目があって、経

営方針に社会貢献が大切なことに気が付きました。

私がいまの暮らしを送れるのは、行政書士事務所のお客様のお蔭であることに気が付いて、取引先である運送業に恩返しをしなければならぬと。

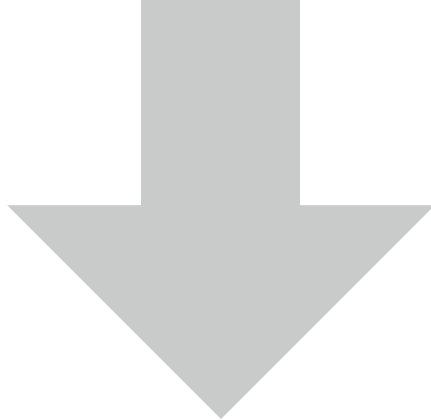
運送業の現場を視察した際、ドライバーの方が眠たい目をこすってボロボロの恰好で働いているのを見て、こういう人たちを救っていかねばいけない、と思いました。

「エンディングノート」は大切

——がんになって、気付いたことは。

私は、30歳までは養

護教諭だったので、健康には気を付けていました。「忙し過ぎてス



続きは『**月刊クオリティ**』本誌を
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
<https://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

TEL 011-644-0101

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)